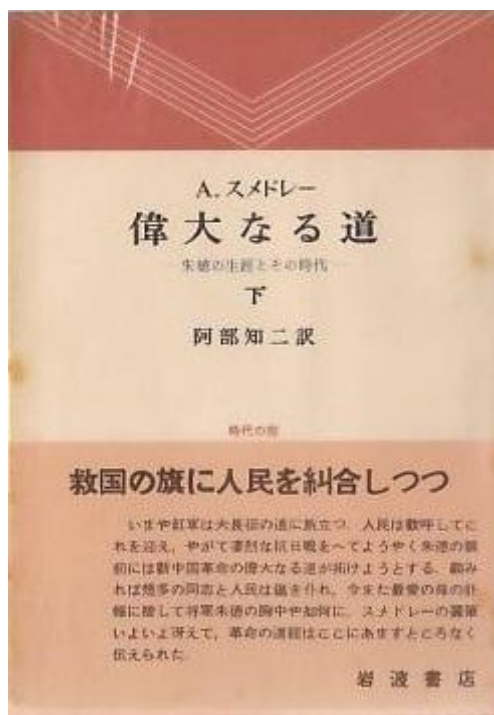


# 柳田雑記 (1)

～アグネス・スメドレーの「偉大なる道」～



长征到达陕北的毛泽东、朱德、周恩来、秦邦宪。

「偉大なる道」は私の青春時代に最も影響を与えた書のひとつである。

私はこの書で紅軍が朱毛軍と呼ばれていたことを知った。そして紅軍の形成には毛沢東より朱徳の役割の方が大きかったかを知った。しかし朱徳は毛沢東に出会ってからは、この人こそ中国革命を指導する人だと思い毛沢東の陰に隠れた。それは毛沢東がいらいらするほどであったという。

アグネス・スメドレーは長征中の紅軍によりそって延安にいった。「偉大なる道」はマッカシーセン風の吹き荒れる中で書き続けられたものである。同時にこの時アグネスは英国から独立を果たしたインドのネルー首相から政治顧問としてインドへ来てほしいという招聘を受けていた。それをも断って、この中国の社会主義を目指す政権の成立過程、その運動を描いたのである。それは朱徳の伝記という形をとった中国の社会主義を目指す革命運動の壮大な歴史の記録であった。

アメリカにおれなくなったスメドレーはロンドンに亡命し、1950年、そこで客死する。「偉大なる道」は遺構となった。

アグネス・スドレー(Agnes Smedley) 1892年2月23日—1950年5月6日

『女一人大地を行く』(角川書店 1962)

『中国紅軍は前進する』(東邦出版社 1965)

『偉大なる道 朱徳の生涯とその時代』(岩波書店 1966)

『中国の夜明け前』(東邦出版社 1966)

2016.12.20 柳田 健